

2023年度 新入社員意識調査の結果から

地域開発調査部 主任研究員

丸澤 千春

“配属ガチャ” に意外と受け身(!?)な北陸の新入社員

「Z世代」と呼ばれるデジタルネイティブの若者たちが、今年も社会人としてデビューした。新型コロナウイルスの感染が下火になったことを受け、数年ぶりに直接面談中心の採用を復活した企業も多かったようだが、学生時代の大半をオンライン授業などで過ごし、人と直接対面した経験が乏しい学生たちにとっては、慣れないことも多く厳しい就活になったのではないだろうか。北陸経済研究所では前年に引き続き、この春、北陸3県の企業に就職した新入社員に対して、就職活動の実態や職業観などについて尋ねるアンケート調査を実施した。本稿では調査の結果から、「ウィズコロナ時代の社会人1年生」の横顔を、前年の調査結果との比較も交えて紹介する。

※調査結果の詳細は、下記URLから別途レポートをご覧ください。
https://www.hokukei.or.jp/app/website/wp-content/uploads/2023-new-employee_report.pdf



※詳細はこちらから

■調査の概要

- 調査目的
北陸3県の企業へ入社した新入社員の就職活動実態、職業感などを把握する
- 調査対象
2023年度新入社員
※富山、石川、福井に本社をもつ企業に春季入社した新入社員に限定
- 調査方法
ウェブアンケート方式
※以下を対象に回答用ウェブサイトのURLを示して誘導
①北経研主催の新入社員セミナー受講者
②北陸銀行主催の新入社員公開セミナー受講者
③北経研賛助会員企業の新入社員（人事採用担当者経由で回答を依頼）
- 調査期間
2023年4月1日～14日
- 有効回答者数
213名

■回答者（n=213名）のプロフィール

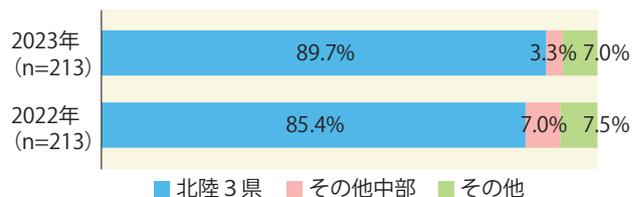
- 性別
男性：67.6% 女性：30.5% 回答しない：1.9%
- 出身県
富山：33.3% 石川：16.4% 福井：39.9%
その他：9.9% 無回答：0.5%
- 最終学歴
大学・大学院：62.0% 短大・高専・専門学校：11.7%
高校：25.8% 無回答：0.5%
- 最終学歴校の所在都道府県
富山：23.0% 石川：15.0% 福井：34.3%
その他：25.4% 無回答：2.3%
- 就職先本社所在地
富山：47.9% 石川：12.7% 福井：39.4%
- 勤務地
富山：45.1% 石川：9.4% 福井：43.2%
その他：0.5% 無回答：1.9%

1. 今年の北陸の新入社員たち

大半が地元採用。Uターン組も増加

回答を寄せた213人の出身地をみると、北陸3県出身者が89.7%と全体の9割を占め、前年同様、地元採用が中心となっていることが分かる。県外出身者をもみても愛知県や岐阜県、長野県、新潟県など中部圏や近畿圏など近県出身者が大半で、北陸の企業の多くが地元・近県採用主体であることは前年と同様だ。

図表1 回答者の出身県

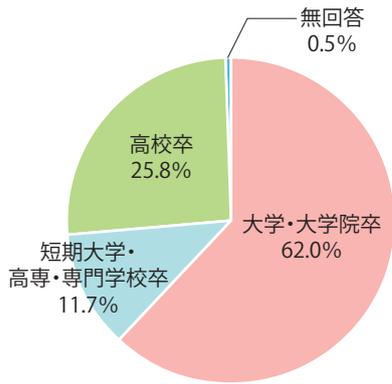


最終学歴は全体の6割（62.0%）が大学・大学院卒で、短大・高専卒が11.7%、高卒が25.8%という構成である。

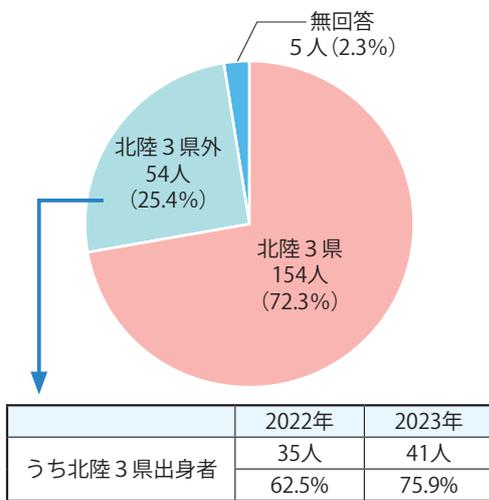
このうち大学・大学院卒については、該当する132人のうち北陸3県内の大学の卒業生は80人（60.6%）で、その他近県の大学出身者19人を合わせると99人（75.0%）、およそ4人に3人が中部地方の大学・大学院出身者となっている。

なお大学・大学院卒に関わらず、北陸3県以外の学校の卒業生54人のうち、北陸3県出身者は41人（75.9%）で、彼らは地元へのUターン就職組ということになる。前年の62.5%に比べると10ポイント以上増えている。

図表2 回答者学歴 (2023年, n=213)



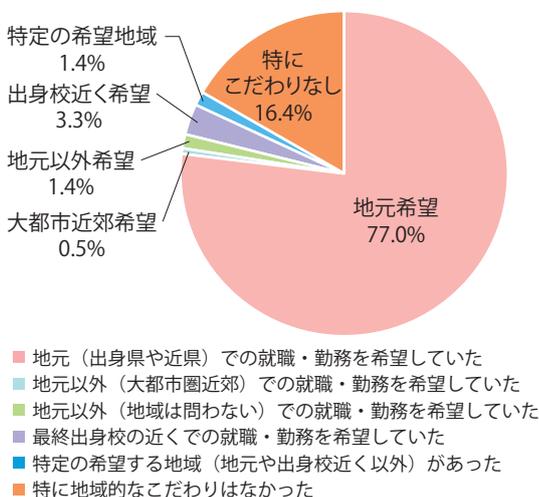
図表3 最終学歴校所在地 (2023年, n=213)



地元での就職希望者がほぼ8割

就職先や勤務地に関する地域的なこだわりがあったかとの問いに対して、「地元(出身県や近県)での就職・勤務を希望していた」が77.0%と8割近くにのぼっており、地元志向の強さがはっきりと見てとれる。

図表4 就職先の地域的なこだわり (2023年, n=213)



2. 今年の就職活動の実態

3人に1人は他県でも就活

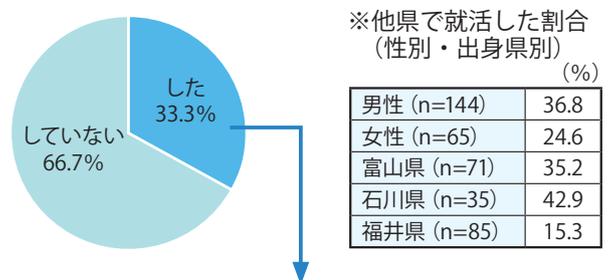
他県で就職活動をしたかどうかについて尋ねたところ、全体の3人に1人（33.3%）が「活動した」と回答した。前年の32.4%とほぼ同じだ。

性別では、男性（36.8%）の方が女性（24.6%）より多く、この点は前年の結果（男性：28.9%、女性36.5%）と逆転している。

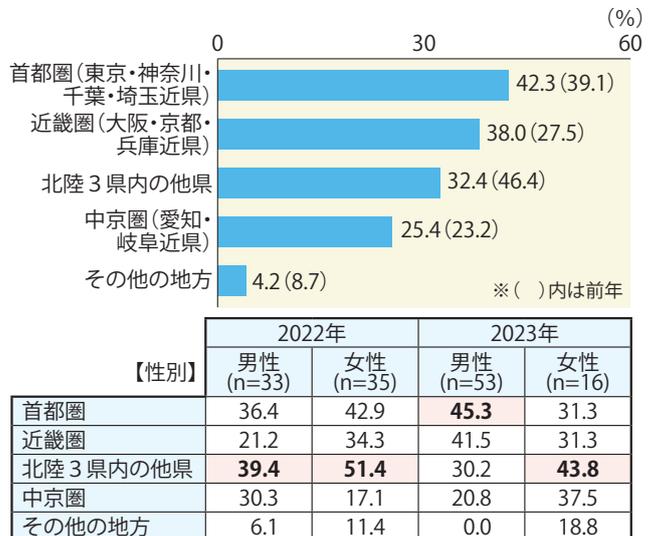
「他県で就活した」回答者に対し、就活エリアを複数回答で尋ねたところ、「首都圏」が42.3%で最も多く、「近畿圏」が38.0%、「北陸3県内の他県」が32.4%と続く。前年に比べ「北陸3県内の他県」が大きく減って（46.4%→32.4%）いるのに反して「首都圏」「近畿圏」は増えているが、新型コロナウイルス感染症の落ち着いたとともに大都市圏への回帰、就活エリアの拡大が起こったものと思われる。

なお、この就活エリアは男女別にみると大きな差が見られ、女性は「北陸3県内の他県」が43.8%で最も多く、中京圏（37.5%）がこれに続くのに対し、男性は首都圏がトップで45.3%、近畿圏が41.5%で続くなど、男性の就活エリアの方がやや大都市圏にシフトしていることが分かる。

図表5 他県での就活状況 (2023年, n=213)



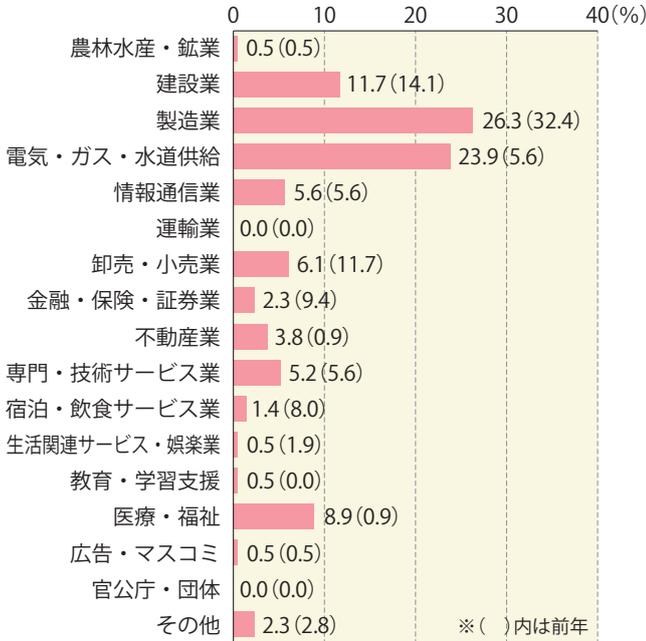
図表6 就活エリア (2023年, n=71)



4人に1人が製造業

就職先の業種をみると、4人に1人（26.3%）は地域の主要産業である製造業に就職している。一方、非製造業では電気・ガス・水道（23.9%）、建設（11.7%）、医療・福祉（8.9%）などが上位である。

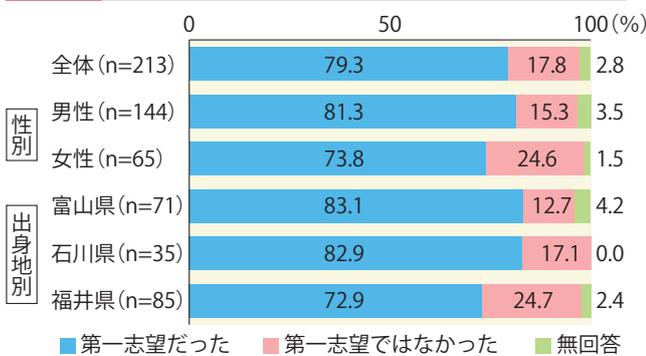
図表7 就職先の業種（2023年，n=213）



一方で、「就職先の業種が第一志望だったか」との問いに対しては、全体では約8割（79.3%）が「第一志望だった」と回答している。これは前年（74.6%）とほぼ同じで、多くが志望に沿った業種への就職を叶えていることが分かる。

「第一志望だった」割合は、性別では女性（73.8%）より男性（81.3%）の方が10ポイント近く高く、また出身地別では富山県が83.1%と最も高くなっている。こうした傾向も前年と同様である。

図表8 業種の第一志望率（2023年，n=213）



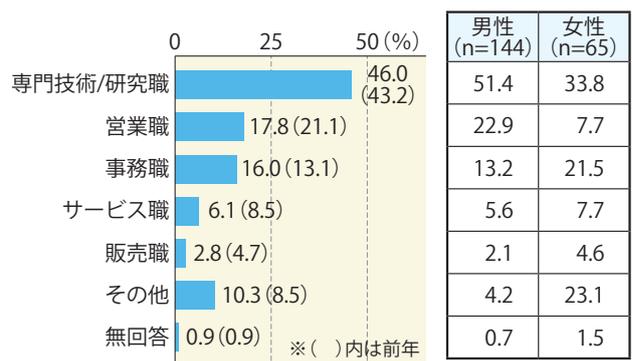
5割近くが専門技術/研究職

職種についてみると、専門技術/研究職（以下、「技

術職」）の46.0%を筆頭に、営業職（17.8%）、事務職（16.0%）が上位で続いている。

男女とも技術職の割合が最も多く、男性51.4%、女性33.8%。男性は技術職に次いで営業職が22.9%と多く、この2職種に集中しているが、女性の方は2位の事務職（21.5%）をはじめ、その他も23.1%と多く、男性よりも職種は広く分散するようだ。こうした傾向も前年と同じだ。

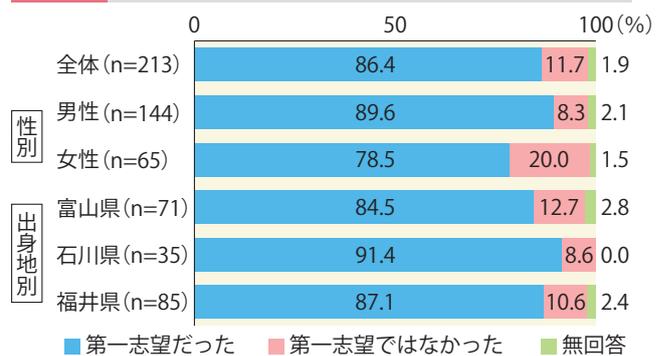
図表9 就職先での職種（2023年，n=213）



業種と同様に「就いた職種が第一志望だったか」との問いに対しては、全体では86.4%とほとんどの回答者が「第一志望だった」としている。女性（78.5%）よりも男性（89.6%）の方が高い傾向も、前年と同じだ。

出身県による差は少ないものの、石川県が91.4%とやや高くなっている。

図表10 職種の第一志望率（2023年，n=213）



半数が「地元」を理由に企業選択

就職先の企業を選んだ理由を複数回答で尋ねたところ、「会社/勤務地が地元（出身地）にある」の48.8%を筆頭に、「希望の業界だった」（47.4%）、「希望の職種だった」（35.2%）が上位で続いている。地元志向の強さが表れた結果だ。

同じ選択肢で「最も大きな理由はどれか」を一つだけ選んでもらった結果をみても、順序は若干変わるも

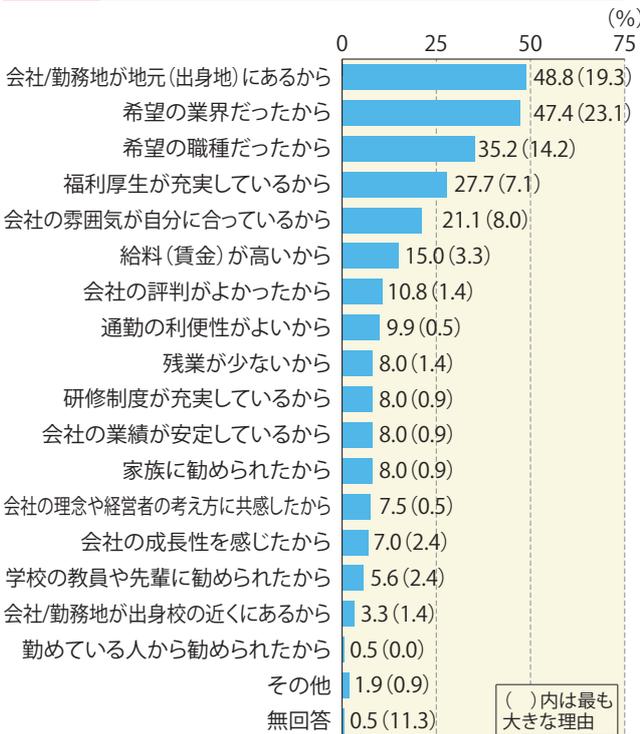
の、ベスト3は同じ顔ぶれだ。

一方で、前年の結果と比較すると、トップの「会社/勤務地が地元(出身地)にある」は20ポイント近い上昇で、地元志向は強まっているようだ。

また「希望の業界だった」「福利厚生が充実している」も、どちらも前年から大きく上昇している。

「給料(賃金)が高い」も約10ポイントと大きく伸びている。ちょうど今回の就活時期に、全国的に初任給を引き上げる動きが強まったことが反映されたとみられる。

図表11 就職先の志望理由 (2023年, n=213)



図表12 就職先の志望理由の前年比較 (n=213)

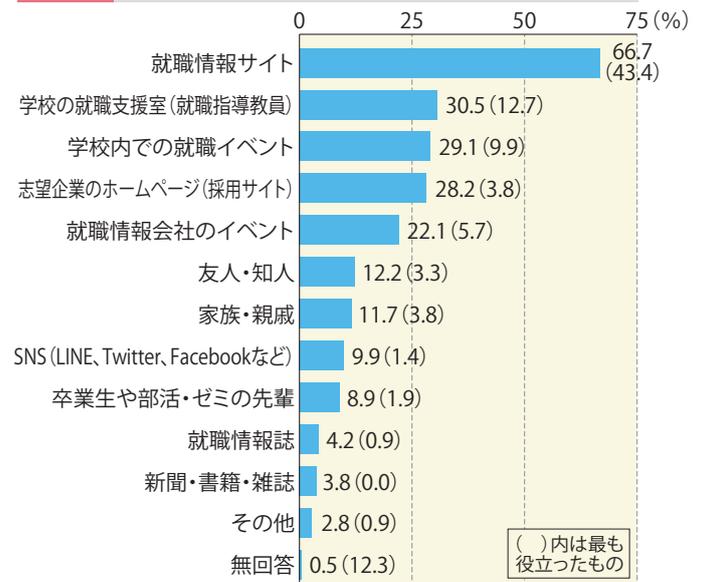
	2022年	2023年	(差)
希望の職種だった	46.9	35.2	-11.7
希望の業界だった	31.9	47.4	15.5
会社の雰囲気が自分に合っている	30.0	21.1	-8.9
会社/勤務地が地元(出身地)にある	29.1	48.8	19.7
通勤の利便性がよい	17.8	9.9	-8.0
会社の評判がよかった	13.6	10.8	-2.8
学校の教員や先輩に勧められた	13.6	5.6	-8.0
福利厚生が充実している	12.2	27.7	15.5
会社の理念や経営者の考え方に共感した	11.7	7.5	-4.2
家族に勧められた	8.5	8.0	-0.5
会社の成長性を感じた	8.0	7.0	-0.9
給料(賃金)が高い	5.2	15.0	9.9
残業が少ない	4.2	8.0	3.8
研修制度が充実している	3.8	8.0	4.2
勤めている人から勧められた	1.4	0.5	-0.9
会社/勤務地が出身校の近くにある	1.4	3.3	1.9

■ 上昇したもの ■ 下降したもの ■ 差が大きいもの

就活に欠かせない「就職情報サイト」

就職活動に関する情報源について尋ねたところ、「就職情報サイト」の66.7%を筆頭に、「学校の就職支援室(就職指導教員)」(30.5%)、「学校内での就職イベント」(29.1%)、「志望企業のホームページ」(28.2%)、就職情報会社のイベント(22.1%)の5つが上位を占めた。同じ選択肢で「最も役立ったもの」を1つ選んでもらった結果をみても、順序は若干変わるものの上位の顔ぶれは同じだ。

図表13 就活情報源 (2023年, n=213)



就職先の選択基準や文章作成に苦労

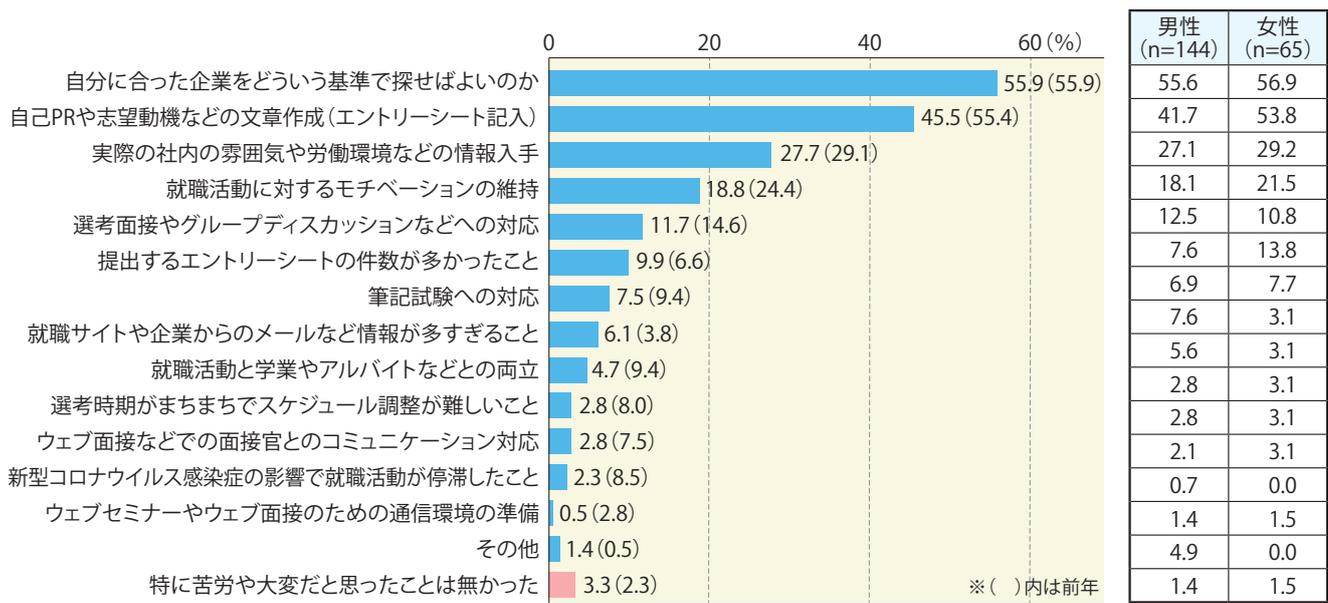
就職活動中に苦労した点については、「自分に合った企業をどういう基準で探せばいいのか」(55.9%)、「自己PRや志望動機などの文章作成」(45.5%)、「実際の社内の雰囲気や労働環境などの情報入手」(27.7%)、「就職活動に対するモチベーションの維持」(18.8%)などが上位にあげられた。これらの顔ぶれも前年と同じだ。

デジタルネイティブの世代らしく、「ウェブセミナーやウェブ面接のための通信環境の準備」(0.5%)や「ウェブ面接などでの面接官とのコミュニケーション対応」(2.8%)など、今どきの就活に欠かせないITリテラシーに関してあまり苦労を感じていないのも前年と同様である。

9割近くが就活の結果に「満足」

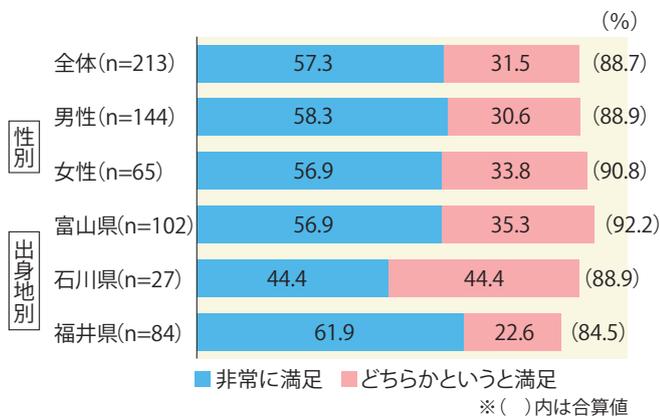
結果として、今の就職先に決まったことの満足度を尋ねたところ、「非常に満足」が57.3%で、「どちらかという満足」(31.5%)と合わせると9割近くの回答者が結果には「満足」している(前年は8割強)。

図表14 就活で苦労したこと (2023年, n=213)



この合算値で比較すると、男性（88.9%）より女性（90.8%）の満足度が高く、企業所在地別では富山県の企業に就職した回答者が92.2%と、石川県（88.9%）、福井県（84.5%）を上回っている。

図表15 就職先に対する満足度 (2023年, n=213)



その結果、「希望する配属先に行けることを会社選定の条件としていた」とする人が3割に上る一方で、「特段の希望などはなかった」人は1割弱（8.0%）。また、「適性や専門性をみて会社側に判断してもらえればよい（29.6%）」や「希望通りの配属にならなくてもやむを得ない（19.7%）」と、会社側の判断に受け身の立場の人は合わせて5割と、配属先に対する考え方は大きく割れた。

およそ3人に1人は「配属先を条件」にするタイプ、3人に2人は「特にこだわりなく会社側の判断にゆだねる」タイプといったところか。希望通りでなかった場合、悩むより先に“早期退社”を選ぶ新入社員が増えているとされるなか、意外と「受け身で、保守的」な新入社員が多いことが見てとれる。

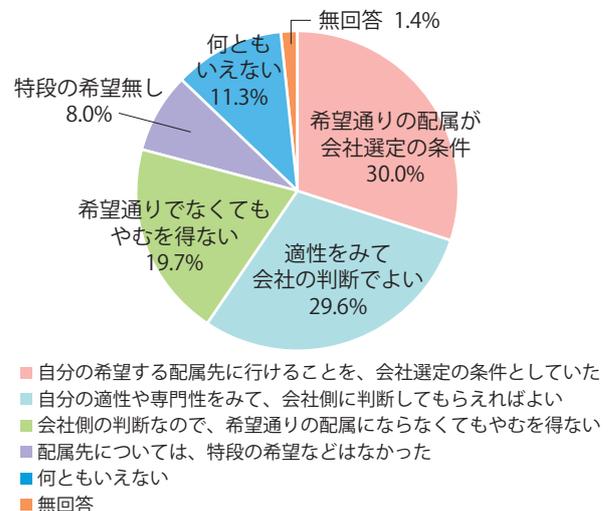
3. 「配属ガチャ」に一喜一憂しない？

入社後の配属先は、就活生にとって最も気になることの一つだ。最近では辞令を受けた配属先をアタリ・ハズレで表現し「配属ガチャ」などと呼ばれているが、近年増えている“超短期退職”の大きな要因ともされ、採用する会社側も就活生側も、ある種の“対策”が求められるようになってきているようだ。

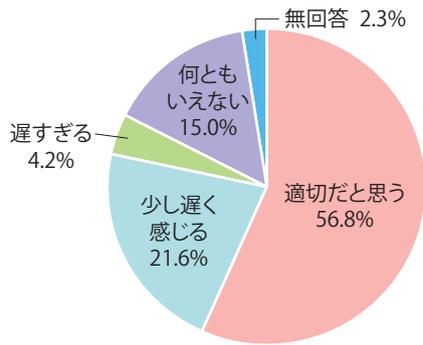
3人に1人は希望配属先を会社選定の条件に

アンケートでは入社後の配属先について、事前にごのように考えていたのかを5つの類型を挙げて、自身の考えに近いものを1つ選んでもらった。

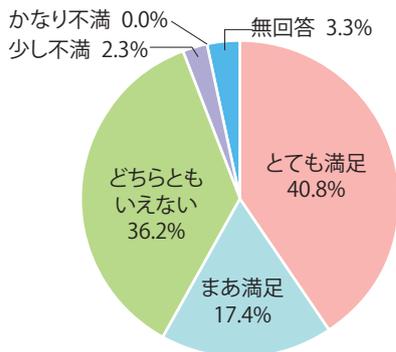
図表16 配属先に対する考え方 (2023年, n=213)



図表17 通知タイミングに対する評価 (2023年, n=213)



図表18 配属先に対する満足度 (2023年, n=213)



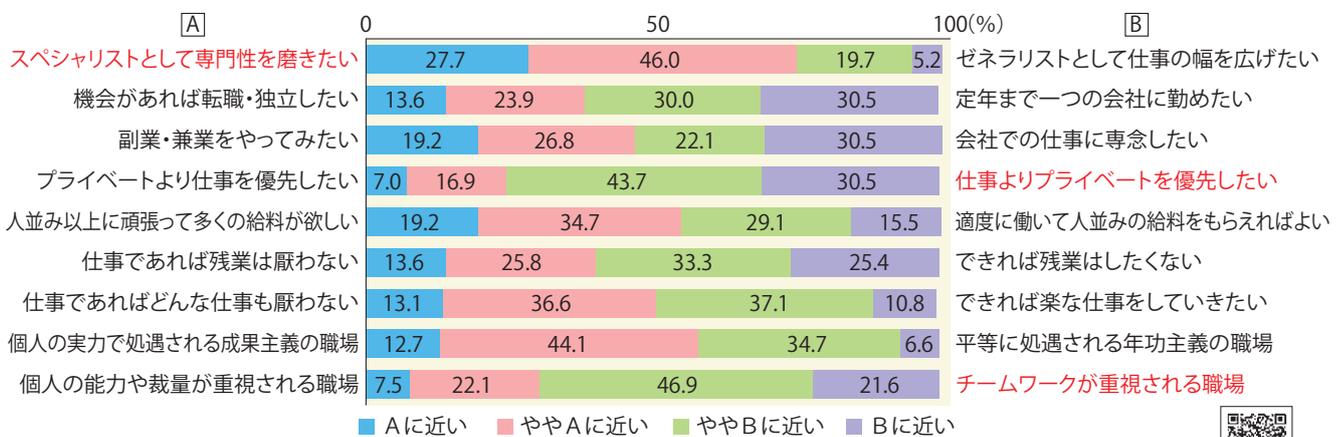
4. “いまだき新入社員”の職業観

前年と同様に、“働き方”や“期待する職場環境”として、対極する9項目の類型を示して「どちらに近いか」を選んでもらった。

図表19は、Aに近い方(左側)が「仕事優先で個人の能力重視タイプ」の割合を、Bに近い方(右側)が「どちらかといえば仕事よりプライベート優先タイプ」の割合を示している。

結果をみると前年と同様、「スペシャリスト志向」と「プライベート優先志向」がともに7割を超えたほか、「チームワーク重視の職場」を志向する人もほぼ

図表19 働き方や職場環境に関する考え (2023年, n=213)



★報告書版では、配属ガチャに関するアンケート結果をさらに深掘りするとともに、受け入れる企業サイドに求められる対応などについても考察します。



※詳細はこちらから

7割と、多数を占めることが分かった。

また、「できれば楽な仕事をしたいかどうか」「給料は人並みか、人並み以上に働いて稼ぎたいか」「実力・成果主義か平等処遇・年功主義か」といった項目は、ほぼ拮抗しているといった点も前年と同じだ。

上司や同僚との人間関係に大きな不安

最後に、これから仕事をしていく上で「どんなことが不安か」について尋ねた。

「仕事での失敗やミス」(30.0%)や「会社の雰囲気」(27.2%)などを抑えて、「上司や同僚との人間関係」が63.8%と飛び抜けて多い結果となった。これも前年と同じ結果だ。

“配属ガチャ”での新入社員の一番の不安は「人間関係」。この世代相手に求められる職場での接し方について、あらためて基本的な理解を深める必要があるようだ。

図表20 仕事をしていくうえでの不安 (2023年, n=213)

